「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容
瀧口修造、阿部展也、大辻清司、牛腸茂雄

2023年12月2日（土）－2024年2月4日（日）

前期：12月2日（土）-1月8日（月・祝）　後期：１月10日（水）-2月4日（日）

※会期中、展示替えがあります

① 牛腸茂雄　《 SELF AND OTHERS 18》 1977年、ゼラチン・シルバー・プリント、新潟県立近代美術館蔵

前衛の終わり。その一歩先へ！

美術評論家の瀧口修造（1903－79）、絵画と写真で活躍した阿部展也（1913－71）、そして写真家である大辻清司（1923－2001）と牛腸茂雄（1946－83）。この4人を結びつける、日本写真史における特異な系譜をご紹介します。

1930年代、海外のシュルレアリスムや抽象芸術の影響を受けて、日本各地に前衛写真が流行。東京では、瀧口や阿部を中心とする「前衛写真協会」が設立されます。技巧を凝らした新奇なイメージが珍重された前衛写真の風潮に満足しなかった瀧口は、「日常現実のふかい襞のかげに潜んでいる美」を見つめ、いたずらに技術を弄ぶべきではないと、熱狂に冷や水を浴びせかけます。しかし、太平洋戦争へと向かう時局において前衛写真が次第に弾圧の対象となっていくなか、この瀧口の指摘は一部をのぞいて十分に検討されることなく、運動は終局に向かいました。

戦後、個々人のなかに前衛写真の精神は継承され、特需景気、経済成長からその限界へとひた走る戦後の日本社会に反応し続けます。とりわけ、写真家としての出発点において瀧口と阿部に強く影響を受けた大辻と、桑沢デザイン研究所における大辻の教え子だった牛腸の二人は、時代に翻弄され移り変わる「日常現実」を、批判的に見つめ続けました。その写真には、反抗と闘争の60年代が過ぎ去った70年代、変容を遂げつつあった「前衛」の血脈が隠されています。

4人の精神があぶりだす、「なんでもないもの」のとんでもなさ。どうぞ穴の開くほど、じっくりとご覧ください。

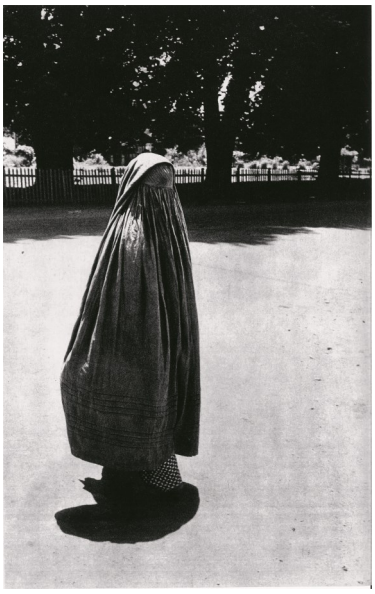
※本展覧会の、今後の巡回はございません。

展示構成

第 1 章 1930-40 年代
瀧口修造と阿部展也 前衛写真の台頭と衰退

1938年、瀧口修造は阿部展也らと共に前衛写真協会を結成し、写真に関する旺盛な批評活動を展開します。特に大きかった功績は、当時、前衛写真に取り組む写真家のあいだでフォトグラムやソラリゼーションなどの撮影・印画技術に注目が集まる中、そうではないストレートな「記録」としての前衛写真がありうることを指摘した点にあります。写真は故意に加工を施さずとも、何かを映し出してしまいます。だからこそ、写真は芸術が縛られてきた自我の壁を乗り越えることができると瀧口は考えました。そして、表層的な平凡の奥に非凡を発見する眼と精神の働きをこそ、重視したのです。

本章では、前衛写真協会の活動が子細に報告された雑誌『フォトタイムス』や、瀧口の思考を深化させていった阿部展也による写真、そして瀧口にインスピレーションを与えたウジェーヌ・アジェの写真を中心に、瀧口がこのような主張をなすに至った文脈や、彼らを取り巻いていた状況などを紹介します。



② 阿部展也《人間》［「新しい写真」『別冊アトリエ』34号(1957年5月)掲載図版］1953－57年頃
新潟市美術館蔵

第 2 章 1950-70 年代
大辻清司 前衛写真の復活と転調

旧制中学在学中に『フォトタイムス』と出会い写真家を志した大辻清司は、戦後になると美術文化協会の写真部に所属し、阿部展也が演出・構成した被写体を撮影するコラボレーション作品を制作します。また、大辻は実験工房やグラフィック集団などの領域横断的な芸術家グループにも参加しますが、これらのグループによるチャレンジを背後から支えていたのは瀧口でした。

いわば、大辻は瀧口や阿部からの強い影響のもと、彼らの思想を継承する形で写真家の仕事を開始したのです。

60年代末になると、大辻の作品は次第に変化の兆しを見せていきます。要因のひとつは、自身が教鞭をとる桑沢デザイン研究所に在学していた高梨豊や牛腸茂雄たち、若き写真学生の存在でした。大辻は彼らの作風を「コンポラ写真」と呼び、なんでもない様子を少し離れて撮影する写真に、当時の時代相からの影響を指摘します。そして彼もまた、「コンポラ写真」、あるいはその時代の空気に共鳴するかのように作風を転調させていったのです。

1975年、『アサヒカメラ』に一年間連載された「大辻清司実験室」は彼の代表作であり、コンポラ写真に対する大辻なりのアンサーとも考えられる重要なシリーズです。

③ イタリア紀行（撮影：瀧口修造）1958年、ゼラチン・シルバー・プリント、プリント：大辻清司、渋谷区立松濤美術館蔵

④ 大辻清司《大辻清司実験室 なんでもない写真》1975年（1980年プリント）、ゼラチン・シルバー・プリント
武蔵野美術大学 美術館・図書館蔵

第 3 章 1960-80 年代

牛腸茂雄 前衛写真のゆくえ

牛腸茂雄は1965年に桑沢デザイン研究所に入学、その2年後、同校で教鞭をとっていた大辻清司からの勧めで写真専攻に進学します。教師と生徒という関係にもかかわらず、大辻と牛腸は独立した二人の写真家として、相互に刺激を与えあいました。

牛腸は、阿部や大辻のように、直接に瀧口からの薫陶を受けたわけではありません。しかし、彼の残した言葉からは瀧口の影響が伺われます。それは彼自身の勉学の成果であると同時に、師である大辻からの影響も色濃くあったのだと考えられます。

1972年から構想が始まり、1977年に写真集として結実した代表作『SELF AND OTHERS』、その後に出版された『見慣れた街の中で』等、しだいに牛腸は精神分析の影響を強く受けるようになります。牛腸が写真と並行して取り組んだ、精神分析に用いられることもあるインクブロットは、瀧口が熱中したシュルレアリスムにおけるデカルコマニーと技法上は類似するものの、その表現は大きく異なっています。この二つのシリーズの比較からは、「前衛」という思想がいつのまにか変容したこと（しかしその根はわずかに残されていること）が見えてきます。

⑤ 牛腸茂雄《 幼年の「時間」2》制作年不詳、ゼラチン・シルバー・プリント、新潟市美術館蔵

⑥　牛腸茂雄《 SELF AND OTHERS 3》1977年、ゼラチン・シルバー・プリント、新潟県立近代美術館蔵

上 ⑧　瀧口修造《〈私の心臓は時を刻む〉Ⅳ“私を見よ”No.69》1962年 透明水彩絵具、紙、富山県美術館蔵

下 ⑨　牛腸茂雄《扉を開けると　3》1972－77年、インク・紙、新潟市美術館蔵

⑦　牛腸茂雄《見慣れた街の中で　1》1978－80年、ラムダプリント、新潟市美術館蔵

◎ 会期中イベント

① 記念対談 大辻先生と牛腸さんの時代

登壇：潮田登久子氏（写真家）・児玉房子氏（写真家）

聞き手：木原天彦（渋谷区立松濤美術館学芸員）

日時：1月13日（土）　午後2時～4時

定員：60名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

参加料：無料（要入館料）

② 特別講座「前衛」写真の時空間

講師：木原天彦（渋谷区立松濤美術館学芸員）

日時：1月21日（日）　午後2時～3時

定員：60名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

参加料：無料（要入館料）

③ 佐藤真監督『SELF AND OTHERS』上映会

日時：12月3日（日）　午前の部：午前10時30分～11時30分、午後の部：午後2時～3時（上映時間：53分）

定員：各60名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

参加料：無料（要入館料）

④ 写真ワークショップ

渋谷に撮りたいものはあるのでしょうか?

牛腸茂雄の暮らした渋谷の街に出て、スナップを撮影してみましょう！ 撮影後は写真を見ながら、講師と共にディスカッションを行います。

講師：木村和平氏（写真家）

日時：12月16日（土）　午後2時～5時

定員：10名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

参加料：無料（要入館料）

持ち物：使い慣れたデジタルカメラもしくはスマートフォン

⑤「なんでもない」音楽―電子音響音楽のひととき

日時：12月17日（日）　午前の部：午前11時～12時

午後の部：午後3時～4時

企画・構成：佐藤亜矢子氏（作曲家・音楽家）

出演：佐藤亜矢子氏・渡辺愛氏（作曲家・音楽家）

会場：地下1階展示室

参加料：無料（要入館料）
＊展示室で行われるコンサートです。入館された方はどなたでもお聴きいただけます
＊事前申込の必要はございません

学芸員によるギャラリートーク

日時：12月8日（金）、1月20日（土）　各日午後2時～（約40分間）

参加料：無料（要入館料）

＊事前申込の必要はございません

館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

12月8日（金）、12月15日（金）、12月22日（金）、1月5日（金）、1月12日（金）、1月19日（金）、1月26日（金）、2月2日（金）　各日午後6時～（約30分間）

参加料：無料（要入館料）　＊各回定員15名
＊事前申込の必要はございません

①～④ イベント事前申込方法

往復はがきまたは当館HPの申込フォームにて承ります。

＊1通または1回のお申込みにつき1名のみ申込可。応募者多数の場合は抽選となります。

［往復はがき］
〒・住所・氏名（ふりがな）・日中連絡のつく電話番 号・参加希望のイベント名、③の場合は時間帯をご記入の上、松濤美術館各イベント係まで。

［申込フォーム］
当館HPの申込フォームでお申込みください。 9/16（土）午前10時から受付開始。
＊迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に当館からのメー ル「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いいたします。

応募締切：「 記念対談 係」12/15（金）必着、「 特別講座 係」 12/22（金）必着、「 上映会 係」「 ワークショップ 係」11/17 （金）必着。申込フォームは各イベント各日午後11時59分まで

◎ 開催概要

展覧会名　「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容

瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

The Spirit of Avant-Garde Photography: Transforming “Nothing Much”

TAKIGUCHI Shuzo, ABE Nobuya, OTSUJI Kiyoji, GOCHO Shigeo

会　期　2023年12月2日（土）－2024年2月4日（日）　※会期中、展示替えがあります

前期：12月2日（土）－1月8日（月）　後期：1月9日（水）-2月4日（日）

休館日　月曜日(ただし1月8日は開館)、12月29日（金）～1月3日(水)、1月9日（火）

開館時間　午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）

会　場　渋谷区立松濤美術館　〒150-0046　東京都渋谷区松濤2-14-14

入館料　一般800円（640円）、大学生640円（510円）、高校生・60歳以上400円（320円）、小中学生100円（80円）

※（　）内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料　※毎週金曜日は渋谷区民無料

※土・日曜日、祝休日は小中学生無料　※障がい者及び付添の方1名は無料

※入館料のお支払いは現金のみとなっております。

特別協力:　武蔵野美術大学 美術館･図書館

企画協力:　株式会社 アートインプレッション

◇交通案内

・京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

・JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

◇次回展覧会のご案内

2024松濤美術館公募展／同時開催：サロン展「土地の記憶と記録 風景を巡る旅」　2024年2月27日(火)～3月16日(土)

●会期や開館時間、イベント等変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ等でご確認ください。

報道関係のお問い合わせ

広報担当　：西・木原・野城（pr-sma@shoto-museum.jp）　展覧会担当：木原

電話：　03-3465-9421　FAX：　03-3460-6366

＊ 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。　＊ 画像のご利用後、データは破棄してください。

＊ 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。　＊ 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。

＊ 掲載後、掲載誌をご送付くださいますようお願いいたします。